

## [巻頭言]

## 情報システム開発と見積り

石井 信明

情報システム開発に失敗の多いことは、もはや常識ともいえる。フレデリック・ブルックスは、1986年に発表した古典的論文、「No Silver Bullet (銀の弾などない)」においてソフトウェア開発の難しさを論じたが、およそ30年経過した現在でも、その状況は変わっていない。さまざまな試みがなされ、その都度話題にはなるが、どれも問題解決の特効薬にはなっていない。あいかわらず、失敗した情報システム開発の話題を耳にする。

失敗の理由はそれぞれに異なるであろうが、ローバート・L・グラスは、「ソフトウェア開発55の真実と10のウソ」(日経BP、2004)の中で、失敗する原因として、「見積りミス」と「仕様凍結ができないこと」の二つを上げている。この内、「仕様凍結」については、要求工学、プロジェクトマネジメントをはじめとして、さまざまなアプローチで研究が進められている。それでは、「見積り」はどうであろうか。

建設、エンジニアリングの分野では、AACE International (<http://www.aacei.org/>) などにより、見積りプロセス、見積り手法、見積り情報と精度の関係などが体系化され、日々、知識とデータが蓄積されている。見積りを含めたコストコントロールの教育プログラムを開発し、業界をあげた専門家養成が行われている。これら長年の活動は、建設、エンジニアリングの分野でのプロジェクトの成功率向上に少なからず

貢献をしていると考えられる。

残念ながら情報システム分野では、見積りが研究対象ではあっても、実務において有用といえるまでの知識の体系化はこれからではないだろうか。実際、情報システム開発において、建設、エンジニアリング分野よりも精度の高い見積りが出来る能力を持った企業は、どれだけあるだろうか。見積り精度が良くなれば、情報システム開発の失敗は少なくなる。見積りの話題は金銭に関わる微妙な事柄が多い。そのため企業、組織の壁を越えて情報交換を行うことには消極的にならざるをえないかもしれない。しかし、情報システムが人間活動を支える社会のインフラであることを考えると、見積り精度向上のために広く英知を集める必要があると言えよう。

この分野では、産業界の会員が多い情報システム学会だからこそできることが多いと考える。たとえば、情報システム開発の見積りプロセス、手法の体系化、見積りデータの整理、コストコントロール手法の体系化である。そのためには、多くの成功事例、失敗事例の収集と蓄積が必要である。人材育成プログラムの開発と教育の実践も必要であろう。システム開発におけるコストエンジニア資格の創設を考えてもよいかもしれない。これらは、一企業の努力で行うには、実現できる広がりや速度に限界がある。情報システム学会のような、公共の組織が中心となる必要があろう。

まずは、情報システム学会における研究発表大会、研究会において「見積り」に関わる議論の活発化が望まれる。そして、情報システム学会誌への「見積り」をテーマとした論文の投稿が増えることを期待したい。

Nobuaki Ishii

文教大学情報学部

Faculty of Information and

Communications, Bunkyo University

[巻頭言] 2014年8月28日受付

©情報システム学会